

國學院大學學術情報リポジトリ

古代祭祀構造の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塩川, 哲朗, Shiokawa, Tetsuro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002451

平成 29 年度 博士（宗教学）学位論文『古代祭祀構造の研究』要約

國學院大學大学院文学研究科 神道学・宗教学専攻

平成 27 年度 博士課程後期入学 塩川哲朗

本博士論文の目的は、『延暦儀式帳』や『延喜式』などの古代祭儀に関する史料の分析に基づいて歴史的視点から古代祭祀構造の基本を明らかにすることである。古代からの日本人が神をどのように信仰していたのか、そのあり方と構造を考えることは、古代からの日本社会の構造の基本を明らかにすることと同義であり、また、各地の神社や宮中での天皇祭祀の原点がどのようなものであったかを明らかにすることでもある。

以下に目次を掲げる。

はじめに 一本論文の目的と方法	1
第 1 部 古代国家の祭祀構造	
第 1 章 古代祈年祭の祭祀構造	7
第 2 章 月次祭・新嘗祭班幣の構造	35
第 3 章 広瀬龍田祭の祭祀構造	55
第 4 章 相嘗祭の祭祀構造と古代神社祭祀の基本形態	77
第 2 部 古代伊勢神宮の祭祀構造	
第 1 章 古代伊勢神宮祭祀の基本構造	103
第 2 章 古代神宮「日祈」行事の一考察	133
第 3 章 古代御饌殿祭祀に関する基礎的考察	161
第 3 部 古代神祇伝承と古典解釈の研究	
第 1 章 「みこもちて」と「よさし」に関する基礎的考察	189
第 2 章 『高橋氏文』にみえる「よさし」の論理	211
補論 西田長男の「みこもちて一よさし」論	233
おわりに 一古代祭祀の基本構造一	269

なお、本博士論文は、「國學院大學大学課程博士論文出版助成金」の交付を受け、平成 30 年 11 月に吉川弘文館より『古代の祭祀構造と伊勢神宮』と題して刊行した。博士論文と構成・内容に変わりはないが、一部表現などを改訂・増補しており、詳細はこちらを御覧頂きたい。

第 1 部 古代国家の祭祀構造

第 1 部では 7 世紀末以降に形成された「神祇令」祭祀のうち、祈年祭、月次祭（班幣）、広瀬龍

田祭、相嘗祭を取り上げてその祭祀構造を分析した。

第1部第1章でとりあげる祈年祭は古代律令祭祀の代表的な国家祭祀である。この祈年祭は朝廷側の理念で形成された祭祀であると考えられているが、儀式次第や祝詞の構造分析からこの点を実証し、国家側の祭祀と在地側の祭祀とが二重構造となっていた点を指摘した。中央の神祇官において各官社の祝部に対し幣帛を一斉に頒布する「班幣」祭祀である祈年祭は、中央における「班幣」に朝廷側の関心が集中した祭祀であり、各地の神社における幣帛奉納に関しては特に規定は設けられなかった。朝廷の関心が極めて高かった伊勢神宮においても、祈年祭幣帛の奉納儀と在地における御田の耕作開始行事が連動せずに別構造となっていたことから、祈年祭はあくまで国家の祭祀であり、在地における既存の祭祀・行事を統制することを目的とはしていなかったと考えられる。また、祈年祭の淵源は5世紀以来の大和朝廷による貴重品・供献品の分配にあると想定され、大和朝廷の祭祀形式は卓越した物品の奉献であったと考えられる。

祈年祭とは班幣祭祀であったわけだが、令制祭祀には祈年祭の他に月次祭・新嘗祭にも班幣祭祀が存在する。この国家祭祀としての班幣祭祀の基本構造は、天皇親祭としての神今食・新嘗祭とは一線を画すものであり、国家祭祀は神祇官・太政官といった国制機構が行うものであるのに対し、天皇祭祀は天皇と内廷官司が行うものであった。第1部第2章では月次祭・新嘗祭の班幣祭祀の構造を伊勢神宮における実態と合わせて考察し、中央における月次祭は、全官社を対象とする祈年祭に比して規模を縮小させて行う尋常の班幣祭祀であって、新嘗祭班幣は天皇親祭の前段行事として行うものであったことを論証した。古代伊勢神宮の月次祭には朝廷からの月次幣帛の奉納儀が組み込まれてはおらず、本来の神宮月次祭は夜半の御饌祭と翌日の赤引御調糸の奉納で完結するものであった。よって、朝廷における祈年祭・月次祭班幣は国家側の理念に基づく国家祭祀でしかなく、天皇祭祀・神宮祭祀と本来的に連動させるものではない別構造の祭祀であったことが解る。

第1部第3章では広瀬龍田祭をとりあげるが、この祭祀は天武朝で成立したものと考えられており、また天武・持統紀にほぼ毎年祭祀記事が掲載されるという特徴を有している。広瀬社・龍田社はその初見記事から天武朝に創始された可能性が高く、広瀬龍田祭を執行するために創建された神社であった。広瀬社・龍田社には既存の奉斎氏族はおらず、朝廷から王・臣と祝詞師が発遣されて祭祀が執行され、合わせて大和の六御県と山口の神々にも幣帛が頒布された。広瀬龍田祭の祝詞には「天下公民」の語が頻出し、大和国の公民が作る作物の豊穰のために祭祀が執行され、それが国家の安泰につながるものとして考えられていたことが想定される。龍田祭の祝詞には崇神天皇の夢に龍田の神が出現して祭祀方式が明示される伝承が見え、天下の災害に天皇が責任を負うという天皇観の確立が天武朝において行われた可能性を示唆させる。

第1部第4章では相嘗祭を取り上げる。相嘗祭は神社の神主が行うものであるとされ、「令釈」にその対象神社とその執行氏族が明記されるという特徴を持つ。相嘗祭は神社側の既存の祭祀体制に朝廷側から幣帛がもたらされる構造となっており、祭祀の主体は神社側に存在した。相嘗祭は神

社側に既存の奉斎氏族や奉斎体制が存在していることが前提となっており、各地の神はその神を伝統的に奉斎してきた者達が、それぞれの地でその神を祭ることによって、初めてその祭祀の恩恵がもたらされるという古代神社祭祀の基本形態を、相嘗祭の祭祀構造から見出すことが出来る。

第2部 古代伊勢神宮の祭祀構造

第2部では古代伊勢神宮の祭祀構造を考察する。神宮祭祀は天皇祭祀の延長線上に存在すると考えられている。古代神宮の恒例祭祀は三節祭であるが、この三節祭は禰宜以下在地奉仕者が行う御饌祭と、その翌日に大神宮司・斎王が参列して執行される祭儀（奉幣祭）の2つから成り立っていた。第2部第1章ではこの古代伊勢神宮祭祀の全体構造について恒例祭祀を中心に考察した。

古代伊勢神宮においては三節祭と神嘗祭例幣のみが天皇祭祀であると認識され、祈年祭・月次祭班幣（神祇官幣帛奉納儀）や神衣祭などは、あくまで国家の祭祀として扱われており、神宮側での重要度は三節祭に比して低かった。夜に執行される御饌奉仕は、古代祭祀の旧態を維持・継承した構造となっており、在地における生産共同体に依拠する形態で御饌奉仕が執行されていた。それに比して新しく設定された神郡や大神宮司（神祇官から派遣されて伊勢神宮全体の政務を司る）を介する財源は、朝廷側によって既存の神宮祭祀を補助し拡充するために成立したものであったと考えられる。

伊勢の斎宮寮に侍る斎内親王（斎王）は天照大神の御杖代ともされるが、伊勢神宮祭祀への関与は三節祭の奉幣祭にしか存在しない。その関与も太玉串を捧げるのみであり、しかも直接斎内親王が玉串を奉ることはせず、大物忌の手によって祭内親王の玉串は奉り置かれていた。他の朝廷からの奉献品も、禰宜や大内人、大物忌父によって正殿ないしは東宝殿などに奉納されており、神域の奥には斎戒した在地奉仕者しか入ることはできなかった。このことは、大神に近侍するためには厳重な斎戒が必須であり、それだけ丁重に大神を祀る必要があったことがわかり、どれだけ朝廷の関与が強くても、在地奉仕者による奉仕体制を基礎として神宮祭祀全体が構成されていたことが解る。

古代伊勢神宮祭祀の基本は、大神の鎮座した地に居住し、その地で生業を営む者達が斎戒して奉仕する体制にあり、朝廷や大神宮司を介してもたらされた幣帛も在地奉仕者の手によってしか奉献されることはなかった。

第2部第2章では古代神宮における「日祈」行事について、『延暦儀式帳』と『延喜式』に基づいて考察を加える。内宮における「日祈」は主に4月（笠・蓑奉献）、6月（夕御饌の際に糸を奉献）、7・8月（大神宮司からの幣帛を受けて執行される）などが存在するが、その幣帛の出所元を分析すると、6月の夕御饌の際に奉献される糸は、禰宜や内人の家内で養蚕したものであった。それに対し、四月の笠・蓑の奉献は、笠・蓑の材料が大神宮司からもたらされ、内人が笠・蓑を製作して大神に奉っていた。7・8月の日祈行事は、大神宮司の用意した幣帛をそのまま大神に奉るものであった。

これらのうち、6月の夕御饌奉仕に際する糸の奉獻は、在地奉仕者の自給的な生産に基づいて供出される形態のものと看取され、祭祀の旧態を示している。三節祭において、禰宜以下在地奉仕者が中心となって行う朝大御饌夕大御饌奉仕にも、禰宜や内人などが自ら漁をして得た海産物の奉獻が存在し、古代神宮祭祀は在地における生業の中で収穫された物品の奉獻を基本として成立したものと考えられる。朝廷側の関心が極めて強かった古代神宮において、朝廷側によって設定された財源に全てを依拠せずに祭祀の旧態を維持していたことは、神の鎮座地における生業に基づいた祭祀が古代祭祀の原点であり、またその基本であった可能性を示唆させる。

第2部第3章では古代外宮における御饌殿祭祀について詳述する。『延暦儀式帳』における内宮と外宮の項目、また禰宜以下奉仕者の職掌条の内容を比較すると、恒例祭祀の内では、内宮では三節祭朝大御饌夕大御饌が、外宮では日別朝夕大御饌が最重要の神事であったことが論証される。日別朝夕大御饌は、御饌殿において天照大神に毎日御饌を供える祭祀であり、『延暦儀式帳』に記された外宮の鎮座目的と一致する。つまり、外宮は御饌殿の存在がその中核となっており、毎日天照大神に御饌を奉仕するためにその存在が生まれたものと考えられる。外宮の正殿は豊受大神が坐すものであるが、内外両宮は共に天照大神を祭るためにその存在があり、御饌殿祭祀の構造はそのことを明瞭に示している。御饌殿祭祀は朝大御饌夕大御饌と同様に、在地居住者の生業の中で収穫された物を奉るという古代祭祀の初源的形態が見出されるものであった。

外宮は雄略朝に鎮座したと『延暦儀式帳』に記されており、少なくとも内宮よりも鎮座時期が遅れており、朝廷の力が一程度高まった時期に外宮が鎮座したことはたしかであろう。御饌殿は殿内の祭祀であり、三節祭の御饌祭は内外宮共に庭上祭祀（心御柱の前に御饌を奉る）である。殿内祭祀である点で、御饌殿祭祀は宮中の新嘗祭・神今食・大嘗祭における天皇の神饌親供と相似する。御饌殿祭祀は大山中にある内宮と比して、朝廷側の援助を受けやすい海に近く開けた外宮の地において行われることとなった。御饌殿祭祀は天皇の御願で始められた祭祀であり、内宮より朝廷側の関与が強い祭祀である。毎日御饌を供えるという点が、内宮より開けた場所への鎮座につながったと推測されるが、宮中の殿内で天照大神を祭る天皇祭祀と、外宮に位置する御饌殿内の御饌供進は、同一線上に位置づけられる祭祀であると考えられる。

第1部と第2部は、祈年祭などの国家祭祀と神宮祭祀の構造がいかなるあり方で存在していたのかを明らかにすることで、古代祭祀における国家祭祀と天皇祭祀の二重性を示すと同時に、国家祭祀と在地祭祀とが二重構造となって併存していたことを明らかにするものであった。国家祭祀と重層的に行われていた天皇祭祀と、各地の氏族・共同体祭祀は互いの祭祀権に直接干渉することはなく、別構造で併存していたと考えられるのである。

第3部 古代神祇伝承と古典解釈の研究

第3部では『古事記』『続日本紀』『延喜式祝詞』などで頻出する「みこともちて」「よさし」と

いう語についての考察を行った。この2つの語は単なる上代における常套句であるというだけでなく、天皇の天下統治を正統化するものとして「天つ神」と天皇との直接的な関係性を明示しているものと考えられる。その背景には天皇による皇祖神への祭祀（天皇祭祀）が存在するであろう。第3部第1章では『古事記』『延喜式祝詞』『続日本紀宣命』における「みこともちて」「よさし」の用例の分析からこの両語の性質を考察し、日本における古代国家形成の特質性を考えた。

「みこともちて」と「よさし」の用例の特徴として、両者とも口頭による伝達、ないしは和語の漢字による述作文にしか見出だされないことが第一に挙げられる。これは両者が単に和語であるという点に留まるものでなく、口頭伝達と強い関連性を持って使用されているとすることができる。また、両者の用例は『古事記』において、神代である上巻に集中しており、神の命令・委任を表現する際に使用されていた。「みこともちて」と「よさし」は、神の命令と委任を口頭で伝達、ないしは表現する場で生み出され、慣例化した和語であったのである。これは両語が、声によって情報を伝達する文化に属することを意味し、それは文書によって情報を伝達する文化よりも先行して成立し、より基層に位置付けられる。このことの傍証は、文書を介する行政が主流となっても任官の儀が口頭によって行われること、天皇の詔が宣命によって唱されること、平安時代の儀式が諸官人たちの口頭伝達によって構成されていること、など多数存在する。

神を祭る「祭祀」は決まった動作・型の組み合わせ・反復によって構成され、時には祝詞などの言葉も挿入される。これらは、動作と声による神祭りの「表現」でもあり、文字以前から存在してきた文化でもある。日本における祭祀と政治は声や動作に基づく文化の中で成立し、その特性を残し続けてきたと言える。日本の祭政は特定の観念に基づいて形成されるものではなく、神と人との対面的関係（祭祀）、人と人との対面的関係（政治）に基づいて成立し、そのことを「みこともちて」と「よさし」の用例は明瞭に示している。

また、祭祀の古型を示す神今食・新嘗祭（天皇祭祀）と伊勢神宮三節祭（神宮祭祀）の御饌奉仕に祝詞は存在せず（『儀式』・『延喜式』）、祝詞は奉幣使が奏上する（神宮三節祭奉幣祭）のものであった。古来、神と間近に接近して祭る祭祀は御饌奉仕であり、そこでは言葉は不必要であった。神への御饌そのものと、御饌を奉仕する所作のみで祭祀は成立していたのである。御饌奉仕は言葉以前に属する祭式であった。なお、伊勢神宮神嘗祭の奉幣祭では、天皇の幣帛を忌部氏が捧げ、中臣氏が祝詞を奏上するが、その祝詞は天皇の言葉（御命）を伊勢の天照大神に伝える内容であり、天皇の命を負い持って伝える「みこともち」の系譜に属するものであった。

第3部第2章では『高橋氏文』における「よさし」の使用例を『高橋氏文』の史料性と共に考察した。天皇の食膳を掌る内膳司の長官（奉膳）は2名であり、これは天皇の食膳に令制以前より高橋氏と安曇氏が奉仕してきたことによるともされる。しかし、内膳司長官の任官例をみると、令制当初より必ずしも両氏が長官に就任してきたわけではなく、令制施行以後に両氏の任官が世襲化されたものと考えられ、日本令の長官2名という規定は、唐令に准じたもので、天皇の食膳を掌ると

いう重大性によるものであった。

そして『高橋氏文』における「よさし」の用例からは、神に奉獻する食膳はその神からもたらされたものであるという発想が反映されており、古代において生業と神（・神祇祭祀）との関係性が一体的なものであったことが想定される。また、高橋氏が天皇祭祀に供奉することは、天皇が皇祖神（天照大神）を祭る行為を、食膳の制作という技術を以て介添えするもので、天照大神への奉仕として意識されていた。そして、天皇祭祀に供奉することは令制の規定以前のものであり、天皇祭祀における序列は、令制の序列に左右されるものではなく、令制以前の伝統に基づいて決定されるものであった。

また、第3部には補論として、長く神道史研究に携わってきた西田長男の「みこともちて」と「よさし」に対する解釈がいかなるものであったのか、またそこから西田長男の学問研究の一端を明らかにした論考1篇を載せる。西田の「みこともちて」「よさし」解釈は研究史において一定の存在感を持つものであるが、その解釈は鈴木重胤の「よさし」注釈と折口信夫の「みこともち」論を継受し、両者を同一的に接合したものであった。その形成の背景には西田が國學院大學で学んだ「国学」が存在していた。

西田は昭和4年から13年まで國學院大學に学んでいるが、昭和7年頃から宮地直一の指導を受けており、そのきっかけは吉田神道の研究であった。西田は宮地の文献に基づいた神道史研究を自身の学問研究の基本に位置付けて研究を進めていく。しかし敗戦を契機に國學院大學の職（講師）を辞し、その論調は変化する。昭和29年に國學院大學に戻った後は、折口信夫やその門弟の民俗研究を自身の研究に取り入れ、時代に即した神道研究を行っていかうとする。そこには敗戦による自己反省と、戦後の時代の流れの中で自身の立場や研究を位置付けていく必要性によるものであった。しかしその中でも、西田の神道に対する「信」が存在し、その中には戦前から考えてきた重胤や折口の「よさし」、「みこともち」論が存在していたのである。西田は時代の流れに左右されながらも、神道に普遍性があるという「信」を実証することを目指していたのであった。西田が宮地より継受した神道史研究は西田の門弟へと継承されていくこととなる。

本博士論文は全体を通して、国家祭祀と在地祭祀の古代における基本的なあり方、そして古代祭祀の旧態や本来のあり方の一端を解明することにより、古代祭祀や古代の神観念の実像に実証的に迫るものである。また、古代日本社会のあり方を祭祀の側面から明らかにするものであり、日本人の生活（生業）と祭祀がどのように成立していたのか、歴史的に考える一助とするものである。